

Oliver Twist における Nancy の役割

角田 裕子

1

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の初期代表作である『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*) は、月刊雑誌『ベントリーズ・ミセラニー』(*Bentley's Miscellany*) に 1837 年 2 月から 39 年 4 月まで連載された。孤児である主人公オリヴァー・トゥイスト (Oliver Twist) が、生まれ育った救貧院での虐待と奉公先の葬儀屋での侮蔑に耐えかね、一大決心の末ロンドンへ向かう。しかしオリヴァーを待ち受けていたのは犯罪で満ち溢れた悪人達との生活であった。それでも生来の純真さを失わずにいたオリヴァーは様々な困難を乗り越えながら紆余曲折を経て、最終的には幸せになる。

自らもジャーナリストであったディケンズは、小説の背景にある当時の救貧法や救貧院制度の問題点、ロンドンでの犯罪等を見事なまでにつづさに観察し、調査していた。その観察眼から生み出された描写は実に迫真的であり、強烈な印象を読者に与える。『オリヴァー・トゥイスト』の 1841 年版の序文でディケンズは次のような決意表明をしている。

It appeared to me that to draw a knot of such associates in crime as really do exist; to paint them in all their deformity, in all their wretchedness, in all the squalid poverty of their lives; to show them as they really are, for ever skulking uneasily through the dirtiest paths of life, with the great, black, ghastly gallows closing up their prospect, turn them where they may; it appeared to me that to do this, would be to attempt a something which was greatly needed, and which would be a service to society.¹

現実をあるがままに書き、それが社会のためであると考えていたディケンズが当時の社会問題を正面から取り上げ、小説を通して是正を促す意図があったことは確実と思われる。とりわけ新救貧法が槍玉にあげられているが、小池滋氏は次の様に説明し

ている。

さて一八三四年の新救貧法では、人間はめいめい自力独力で食って行き生きて行くべきであり、他人に余計なお節介をやいたり、そのための税金を取られるのはご免だ、というホイッグ党支持者の精神を反映して、救済を受ける貧民たちに、ただで施しをするのではなく、彼等にもできるだけの仕事をして、自分の食い扶持を稼がせることになった。……そうした法律を杓子定規にふりかざし、権力をかさに着て弱い者いじめをする小役人が、あちこちの教区に見られたのであり、ディケンズはバンプルという人間によってこれを天下にさらし、笑いとしんがりの痛棒を喰らわせたのである。²

しかし『オリヴァー・トゥイスト』が果たして終始一貫して社会問題のみを扱っているかどうかは疑わしい。小説の後半になると、焦点は社会問題からむしろオリヴァーを取り巻く善人と悪人の対立へと移行していくからだ。そこで繰り広げられるのは徹底した勧善懲悪の姿勢であり、読者は自然とそれを特徴とする物語の運びに巻き込まれる。

『オリヴァー・トゥイスト』は、オリヴァーを中心として三つの場面に大別出来るだろう。一つ目はオリヴァーが生まれ育った救貧院と奉公先であるサワベリー(Mr Sowerberry)が営む葬儀屋での生活である。二つ目はロンドンで繰り広げられる悪人フェイギン(Fagin)とサイクス(Sikes)との生活である。三つ目は同じくロンドンでの善人ブラウンロー(Mr Brownlow)やローズ・メイリー(Rose Maylie)との生活である。救貧院と葬儀屋の場面では、その目もあてられない実態をこうした制度の象徴である小役人バンプル(Bumble)を通して暴いている。フェイギンやサイクスを初めとする悪人は、その多くが流刑又は死刑という形で罰を受けている。一方善人の象徴であるローズは、突然の病で死の淵を彷徨いながらも奇跡的に生還する。この様に『オリヴァー・トゥイスト』では全ての登場人物を善人か悪人かに明確に区別することができ、しかも善人はいつまでも善人で、悪人もいつまでも悪人であるという終始一貫した描かれ方をされている。しかし小説の中で唯一変化する、つまり悪人から善人へと改心する人物がいる。それは、悪人フェイギンの下で育てられ、サイクスの情婦となっているナンシー(Nancy)である。ナンシーは純粋無垢なオリヴァーと接するうちに己の罪を自覚し、

同時に今迄の人生を後悔し始める。悪の世界で必死にもがいているオリヴァーをナンシーはやがて助ける行動をするが、皮肉なことにそれが仇となってナンシーはサイクスの手により非業の死を遂げる。

『オリヴァー・トゥイスト』の1841年版の序文でディケンズは執筆の動機を“...I wished to show, in little Oliver, the principle of Good surviving through every adverse circumstance, and triumphing at last...”(457)としている。これは『オリヴァー・トゥイスト』を勧善懲悪の小説にしようとするディケンズの意志そのものである。それならば悪人から善人へと変化するナンシーは何故死ななければならなかったかが疑問になる。勧善懲悪を主体とするならば、ナンシーこそ救われるべき人物だろう。本論文ではこのナンシーに注目し、ナンシーの存在がこの小説でどのような役割を果たしているかを考察する。

2

ナンシーは物心がつく頃にはすでにフェイギンの下で養育されていた。フェイギンは路上に無数といる孤児を集めて掏摸に仕立て、その盗品の売買で生活している人物である。オリヴァーがロンドンへ来て初めて接した人物であるドジャー(Dodger)やチャーリー・ベイツ(Charley Bates)もその一員であり、彼らは掏摸を日常茶飯事としている。

ドジャーにフェイギンの家へ連れて来られたオリヴァーは初めてナンシーと出会い、次の様な印象を持つ。

When this game had been played a great many times, a couple of young ladies came to see the young gentlemen, one of whom was called Bet and the other Nancy. They wore a good deal of hair, not very neatly turned up behind, and were rather untidy about the shoes and stockings. They were not exactly pretty, perhaps; but they had a great deal of colour in their faces, and looked quite stout and hearty. Being remarkably free and agreeable in their manners, Oliver thought them very nice girls indeed, as there is no doubt they were. (71; bk.1, ch.9)

オリヴァーの目に映ったナンシーはとても元気で屈託無く、愛想が良い。また主人であるフェイギンや情夫のサイクスに対しては忠実である。これは完璧な内助の功と言っても過言ではない。その様子を端的に理解出来るのは、オリヴァーを誘拐するた

め一役買ったナンシーの振舞いであろう。フェイギンとサイクスにオリヴァーの誘拐を強要された時点ではその任務を拒んでいたナンシーだが、いざ実行するとなると完璧なまでの演技を披露する。そのためオリヴァーを誘拐する場面では実姉として演技するナンシーの嘘を誰一人見抜くことが出来ない。そんなナンシーをフェイギンは “ Ah! she’s a clever girl, my dears ” (102; bk.1, ch.13)と、サイクスは “ She’s a honor to her sex ” (102; bk.1, ch.13)と二人共絶賛している。

『オリヴァー・トゥイスト』での犯罪場面で特に印象が強いのは、サイクスがオリヴァーを伴って行うローズ宅への押し入り強盗だろう。彼らは実に用意周到に計画し、各自の役割を完璧に果たしている。犯罪が集団で行われる場合に絶対条件となるのは、お互いの強固な信頼関係だろう。彼らは利害損失を共にする運命共同体であるのだ。しかしそれには各自が弱みを握り合う、ある種の緊張関係を孕むことも意味する。彼らにとっては、裏切り又はそれを仄めかす行為は決して許されない。言わば強力な監視社会でもあるのだ。そのような環境でもナンシーはフェイギンとサイクスに非常に信頼されており、彼女自身も次の様に自覚している。

She remembered that both the crafty Jew and the brutal Sikes had confided to her schemes, which had been hidden from all others, in the full confidence that she was trustworthy, and beyond the reach of their suspicion. . . . (370; bk.3, ch.7)

しかしその様にフェイギンとサイクスの信頼が厚いナンシーは、オリヴァーとの出会いにより変化し始める。

3

『オリヴァー・トゥイスト』連載中の1837年にディケンズは親友ジョン・フォースター(John Forster, 1812-76)へ次の手紙を送っている。

I am glad you like Oliver this month - especially glad that you particularize the first chapter. I hope to do great things with Nancy.³

ディケンズが指すのは第1巻16章である。ナンシーとサイクスに誘拐されてフェイギンの下へ連れて来られたオリヴァーは、恐怖感に襲われて事の次第を理解することが出来ない。やっとの思いで家中に飴する様な金切り声を上げながら死に物狂いで部

屋から逃げ出す。しかしその必死の思いも虚しくオリヴァーは易々と捕まってしまう。そんなオリヴァーの様子を見ていたフェイギンは激昂し、彼をこれでもかというくらい棒で激しく殴る。オリヴァーへの虐待を見ていたナンシーはついに耐え切れず、フェイギンから棒をもぎ取って彼を庇う。その様子は “The girl stamped her foot violently on the floor as she vented this threat; and with her lips compressed, and her hands clenched, looked alternately at the Jew and the other robber, her face quite colourless from the passion of rage into which she had gradually worked herself” (131; bk.1, ch.16)と描かれる。足を踏み鳴らし、顔面蒼白となって怒りを顕にするナンシーは、普段の様子からは考えられない。この行動に最も驚いたのが、ナンシーを熟知していたはずのフェイギンである。フェイギンはナンシーのあまりの様変わりに動揺を隠せず、ただひたすら “in a soothing tone” (131; bk.1, ch.16)で話しかけることしか出来ない。一方オリヴァーを庇うナンシーの一連の行動と言動に対し、サイクスはあくまでも彼女を馬鹿にする。

‘God Almighty help me, I am!’ cried the girl passionately; ‘and I wish I had been struck dead in the street, or changed places with them we passed so near to-night, before I had lent a hand in bringing him here. He’s a thief, a liar, a devil, all that’s bad, from this night forth; isn’t that enough for the old wretch without blows?’
(132; bk.1, ch.16)

ナンシーがオリヴァーを庇うのは単に同情しているからではない。ナンシーはオリヴァーがフェイギンの下で暮らすようになった場合を想定し、その後どんな状況が彼を待ち受けているかを危惧しているのである。このナンシーの態度は一見すると実に優しい性質であり、思いやりに溢れたものである。しかし危惧するということは、ナンシーが自分の今迄の生活に負い目をいくらか感じており、目の前にいる純粹無垢な子供に自分と同じ思いをさせたくないという気持ちがあることを示唆するのではないだろうか。ナンシーはオリヴァーが悪に染まることに耐えられず、とっさに行動したのである。

この時のナンシーの行動はまだ衝動的にすぎなかった。だが次第に彼女はオリヴァーを助けるべく確信を持って行動するようになる。

‘I have saved you from being ill-used once, and I will again, and I do now,’ continued the girl aloud; ‘for those would have fetched you, if I had not, would have been far more rough than me. I have promised for your being quiet and

silent; if you are not, you will only do harm to yourself and me too, and perhaps be my death. See here! I have borne all this for you already, as true as God sees me show it.' (166; bk.1, ch.20)

オリヴァーはサイクスの押し入り強盗の手助け役に抜擢されてしまう。これは、何よりも悪が嫌いなオリヴァーにとっては耐え難いことであった。ナンシーはそんなオリヴァーをどんなに不利な立場にしようとも何とかして助けようとする。ナンシーがオリヴァーを必死で守ろうとする姿勢は実に強いものであり、彼女の決定的な変化の瞬間とも考えられる。

ナンシーの変化については彼女の外見からも察しがつく。ナンシーは当初、先に見たように“... they had a great deal of colour in their faces, and looked quite stout and hearty” (71; bk.1, ch.9)と実に澁刺とした人物であったが、次第に“... her countenance was white and agitated, and she trembled with very earnestness” (166; bk.1, ch.20)とまるで別人であるかようになってしまう。彼女の変化は、外見という実際に目にするところからも推測出来るのが興味深い。

4

『オリヴァー・トゥイスト』が執筆された19世紀は、男女の役割が厳格に分かれていた。江藤秀一氏と松本三枝子氏は次の様に分かり易く当時の思想を説明している。

ヴィクトリア朝の理想の女性像とはどのような女性だったのだろうか。それは、コヴェントリ・パットモアの英詩『家庭の天使』に代表されるような自己犠牲的聖女像であった。.....外界の危険や悪に冒されやすい男たちを、家庭という聖域で癒し守る聖女の役割を女性に求めた。.....この「家庭の天使」の対極にあるのが「転落した女」である。「転落した女」とは、家父長制の規範が求める女性像から逸脱した女である。家庭という女の聖域を守れぬ女、自制を知らず自らの欲望に負けた女ということになる。愛人や娼婦がそれにあたり、彼女たちは社会規範の外に位置づけられた。⁴

『オリヴァー・トゥイスト』では、主人公であるはずのオリヴァーの印象が意外と薄いと主張する批評がある。これは、オリヴァーが生まれてからずっと純粹無垢なま

までであるので現実性に乏しいからであろう。アラン・グラント(Allan Grant)は“ Oliver Twist is peculiarly a figure without any character. He has no personality or child-like characteristics ”⁵と主張している。一方ナンシーについては、ブライアン・マレイ(Brian Murray)が“ Nancy is perhaps one of the more “ realistic ”characters in Dickens’s early fiction ”⁶と主張している。ナンシーに現実性があることを示すのは、例えば次の引用文であろう。

‘Civil words, you villain! Yes; you deserve’em from me. I thieved for you when I was a child not half as old as this (pointing to Oliver). I have been in the same trade, and in the same service, for twelve years since; don’t you know it? Speak out! don’t you know it?’ (133; bk.1, ch.16)

クリストファー・ヒバート(Christopher Hibbert, 1924-)は著書で「ロンドンの売春婦の大部分とは言えないまでも、多くはひも、つまりこの種の男たちの自称「愛人」をもっていたが、彼らは女から吸い上げる金に加えて、掏摸、空巣狙い、犬泥棒、強盗などのけちな犯罪から生計を稼いでいた。……彼らは幼少期に捨てられたり、孤児となって、体は汚れたまま裸足で、ぼろ服を着て、乞食をしたり、盗みを働いたりしながら街を徘徊し、夜になると、ある程度彼らの犯罪行為に頼って暮らしを立てているどこかの家族の許へ帰るか、または安下宿屋へ帰るという生活をしてきていた。⁷」と述べている。この生活はまさしくナンシーの生活そのものである。5歳の時から泥棒をして娼婦と成り果てたナンシーは現実に存在する女性だったことは間違いないだろう。

5

オリヴァーを助けようと行動するナンシーが変化しているのは確実である。しかしこれはあくまでも変化への契機にすぎない。ナンシーが改心という言葉の内面の変化を決定付ける状態になるには、ローズの存在が必要不可欠となる。

ローズが初めて登場するのは、第2巻7章の次の引用文である。

The younger lady was in the lovely bloom and spring-time of womanhood; at that age when, if ever angels be for God’s good purposes enthroned in mortal forms,

they may be without impiety supposed to abide in such as hers. . . . The very intelligence that shone in her deep blue eye and was stamped upon her noble head, seemed scarcely of her age or the world, and yet the changing expression of sweetness and good humour, the thousand lights that played about the face and left no shadow there; above all, the smile - the cheerful happy smile - were entwined with the best sympathies and affections of our nature. (235; bk.2, ch.7)

ローズは、ディケンズの義妹であるメアリー・ホガース(Mary Hogarth, 1820-37)をモデルにしていると考えられている。間二郎氏はメアリーを「新婚間もない姉夫婦の家に同居して家事と育児を手伝い、同家の「欠くべからざる存在」となったがほぼ一年後に十七歳の若さで急逝した。知性、明るさ、作品への共感力などの点でディケンズの求めを満たしていた彼女の急死は、彼に執筆を中断させるほどの衝撃を与えた。...彼の作品に現われ続ける天使的なヒロインたちは、程度の差こそあれすべてこの義妹の面影を宿している。⁸」と述べており、彼女はディケンズの理想女性像と見なすことが出来るであろう。

ローズの一番の特徴は一体何であろうか。それは「慈悲の心」であろう。ナンシーは、モンクス(Monks)という男がフェイギンと取引をしてオリヴァーを泥棒にしたがっていたことを耳にする。そして実はモンクスとオリヴァーは異母兄弟であり、父の遺言に基づくオリヴァーの相続すべき金銭をモンクスが不当に手にしようとする陰謀を知ったナンシーは、ローズに打ち明ける。自らの危険を顧みずに行動したナンシーをローズは何とかして悪の道から救おうとする。己の過去を恥じ、そして深い後悔に苛まれているナンシーに掛けたローズの言葉が、“ It is never too late, . . . for penitence and atonement ” (336; bk.3, ch.3)である。このローズのキリスト教的な魂の救いは、ディケンズが自分の子供達のために書いた *The Life of Our Lord*(1934) に詳しく書かれている。“ We learn from this that we must always forgive those who have done us any harm, when they come to us and say they are truly sorry for it ”⁹からディケンズ自身もローズの言葉通りの思想を持っていたことが分かる。

ナンシーの内面の変化を決定付ける状態は改心することであり、それにはローズの存在が必要不可欠である為、彼女の特徴を考察してきた。次にナンシーの改心の証拠とも言える場面を考察する。オリヴァーを少しでも悪の世界から遠ざけようとしたナ

ンシーは、後日改めてローズとブラウンローにモンクスとオリヴァーの関係を打ち明ける。しかし最近のナンシーの変化をもはや見過ごせなくなったフェイギンが送り込んだスパイにより彼女の行動がサイクスへと知られてしまう。サイクスはナンシーを裏切り者に見なして激昂し、彼女を殺害しようとする。

‘... let us both leave this dreadful place, and far apart lead better lives, and forget how we have lived, except in prayers, and never see each other more. It is never too late to repent. They told me so - I feel it now - but we must have time - a little, little, time!’ (396; bk.3, ch.9)

ローズにいくら説得されても自分の人生はもはや絶望的であると頑なに心を閉ざしていたナンシーが、初めてやり直しをする決意をした場面である。これは、ナンシーが己の過去と決別して改心を成し遂げた瞬間である。しかし皮肉なことに、それは同時に彼女が惨殺される瞬間でもあった。

6

勸善懲悪が色濃い『オリヴァー・トゥイスト』で唯一改心するナンシーが何故死ななければならなかったのか。ナンシーについての批評はほとんどが次の点を中心に展開されている。それは、ディケンズは結局生粋のヴィクトリア朝人である為、娼婦ナンシーをあくまで「転落した女」としか見なせなかったという意見であり、大勢を占めている。しかしその説には疑問を抱かざるを得ない。なぜならディケンズはナンシーを単なる「転落した女」として創造していないからである。19世紀の当時は男女の役割分担が厳格に分かれており、理想女性像とされたのは「家庭の天使」で、その対極が「転落した女」であると先に述べた。しかし興味深いことに「転落した女」であるはずのナンシーが「家庭の天使」の役割をしている場面がある。

Seated by the window, busily engaged in patching an old waistcoat which formed a portion of the robber's ordinary dress, was a female, so pale and reduced with watching and privation that there would have been considerable difficulty in recognizing her as the same Nancy who has already figured in this tale, but for the voice in which she replied to Mr Sikes's question. (318; bk.3, ch.2)

サイクスのために寝食を忘れて看病するナンシーは、まさにヴィクトリア朝の理想

女性像である自己犠牲的聖女像を彷彿させる。マイケル・スレイター(Michael Slater)は著書 *Dickens and Women*(1986)でナンシーを次の様に評価している。“ But, as Dickens portrays her, with her resourcefulness and quick-witted cleverness, her various moods, her fears and her courage, she emerges as a far more complete embodiment of his conception of woman’s nature than any of his other early female characters ”¹⁰この説によれば、ディケンズはナンシーを単なる現実的な女性として創造したのではなく、彼自身の女性観をナンシーに体現させたことになる。

ディケンズと娼婦を関連付けて考察する際、ユレイニア・コテージ(Urania Cottage)に注目しないわけにはいかない。これはディケンズがアンジェラ・バーデット・クーツ(Angela Burdett Coutts, 1814-1906)と共に設立した娼婦更正施設である。それは、娼婦達に犯罪世界からの避難所として与え、「転落した女」を救済することを目的とした。彼女達はそこで家事や宗教教育を受け、後に植民地へ移住することになっていた。このディケンズと全く同じ行動を取ったのが、ナンシーに人生のやり直しをするように必死に説得する、他ならぬローズとブラウンローである。次の引用からその様子が分かる。

‘... a quiet asylum, either in England, or, if you fear to remain here, in some foreign country, it is not only within the compass of our ability but our most anxious wish to secure to you. . . . Come. I would not have you go back to exchange one word with any old companion, or take one look at any old haunt, or breathe the very air which is pestilence and death to you. Quit them all, while there is time and opportunity.’ (388; bk.3, ch.8)

「転落した女」であるはずのナンシーに「家庭の天使」の一面を授け、ディケンズの実際の活動と同じ事を善人のローズとブラウンローがする等、ディケンズがナンシーを単なる「転落した女」と見なしているとは考えにくい。むしろ人生の一定期間を悪に費やしてしまうと、容易には抜け出せなくなる悲劇をディケンズはナンシーを通して暗示していると思われる。“ It is never too late, . . . for penitence and atonement ” (336; bk.3 ch.3)というローズの言葉通りに改心しても、ヴィクトリア朝当時の厳しい規範社会ではナンシーの様な女性は人生のやり直しが容易くは出来なかった。ディケンズがユレイニア・コテージの収容者達をオーストラリアへ移住させたのも、社会に対する

やり場の無い怒りのはけ口とは考えられないだろうか。ナンシーは、このような悲劇を生み出す社会への風刺の役割を担っていると考えられる。

註

- 1 Charles Dickens, *Oliver Twist*, ed. Philip Horne (London: Penguin, 2002) 457.以後本論文中の括弧内の数字は、このテキストの頁数を示すものとする。
- 2 小池滋 『オリヴァー・トゥイスト 下』、筑摩書房、p.383, 2005。
- 3 Charles Dickens, “To John Forster.” 3 Nov. 1837. *The Letters of Charles Dickens*, ed. Madeline House and Graham Storey, Vol. 1. (Oxford: Clarendon, 1965) 328.
- 4 江藤秀一・松本三枝子 『イギリス文化・文学への誘い』、開拓社、p.205, 2000。
- 5 Allan Grant, *A Preface to Dickens* (London: Longman, 1984) 96.
- 6 Brian Murray, *Charles Dickens* (New York: Continuum, 1994) 80.
- 7 クリストファー・ヒバート著 横山徳爾訳 『ロンドンある都市の伝記』、朝日出版社、p.344-45, 1997。
- 8 松村昌家編 『ディケンズ小事典』、研究社、p.100, 1994。
- 9 Charles Dickens, *The Life of Our Lord* (New York: Simon, 1999) 50-51.
- 10 Michael Slater, *Dickens and Women* (London: Dent, 1986) 221.

参考文献

- Acroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Harmondsworth: Penguin, 1948.
- ケロウ・チェズニー著 植松靖夫・中坪千夏子訳 『ヴィクトリア朝の下層社会』
高科書店 (1991)
- Collins, Phillip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1962.
- Daleski, H.M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber, 1970.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. London: Penguin, 2002.
- . *Oliver Twist* with Introduction and Notes by Torajiro Sawamura. Tokyo: Kenkyusha, 1958.

- . "To John Forster." 3 Nov. 1837. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House and Graham Storey. Vol.1. Oxford: Clarendon, 1965. 327-28.
- . *The Life of Our Lord*. New York: Simon, 1999.
- Emsley, Clive. *Crime and Society in England*. London: Longman, 1987.
- 江藤秀一・松本三枝子 『イギリス文化・文学への誘い』 開拓社 (2000)
- Fielding, K.J. *Charles Dickens*. London: Longman, 1965.
- . *Studying Charles Dickens*. Harlow: Longman, 1986.
- Gissing, George. *Critical Studies of The Works of Charles Dickens*. New York: Haskell, 1965.
- . *The Immortal Dickens*. New York: Kraus Reprint, 1969.
- Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. London: Longman, 1984.
- クリストファー・ヒバート著 横山徳爾訳 『ロンドンある都市の伝記』
朝日新聞社 (1997)
- Ingham, Patricia. *Dickens, women and language*. London: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- 川本静子 『ディケンズ文学の「街の天使」像(1)』 『英語青年』 1978年10月号
研究社 (1978)
- . 『ディケンズ文学の「街の天使」像(2)』 『英語青年』 1978年12月号
研究社 (1978)
- 小池滋 『オリヴァー・ツイスト 上・下』 筑摩書房 (2005)
- . 『ロンドン』 中央公論社 (1978)
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Domby*. London: Chatto, 1965.
- 松村昌家編 『ディケンズ小事典』 研究社 (1994)
- Mayhew, Henry. *Selections from "London Labour and the London Poor."* Ed. John L. Bradley.
London: Oxford UP, 1965.
- Murray, Brian. *Charles Dickens*. New York: Continuum, 1994.
- 荻野昌利 『歴史を<読む> - ヴィクトリア朝の思想と文化』 英宝社 (2005)
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. New York: Oxford UP, 2000.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1986.
- マイケル・スレイター著 佐々木徹訳 『ディケンズの遺産 人間と作品の全体像』
原書房 (2005)
- 角山栄 『産業革命と民衆』 河出書房新社 (1975)

Weeler, Burton M. "The Text and Plan of *Oliver Twist*." *Dickens Studies Annual*:

Essays on Victorian Fiction. Ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano.

Vol.12. New York: AMS, 1983. 41-61.

Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker, 1970.

『英語英文学論叢』（日本大学大学院英語英文学研究会、第28号、平成19年3月発行）

23~35頁